

2. 起業

佐伯正浩氏は、起業する少しまえ、保育士の久美子氏と出会い、結婚して所帯をもった。結婚後、半年ほどで独立を決めた佐伯氏であったが、久美子氏の支えもあってスムーズに次のステップへ進むことができた。そして、1989年9月に今治市小泉にグリーンメンテナンスを創業し、29歳で独立を果たした。2002年4月には有限会社に改組し現在に至るが、2024年9月で創業から35年を迎える。

表 1 グリーンメンテナンスの事業内容

| 部門 | 内容 |
|----------------|-------------------------|
| 汚水（排水） 処理部門 | 汚水（排水）処理施設 維持・管理業務 |
| | 汚水（排水）コンサルティング業務 |
| | 汚水（排水）新設・増設の設計・施工業務 |
| | 汚水（排水）保守点検の常駐管理業務 |
| | 汚水（排水）機器の販売・修理業務 |
| | 工業用水用ろ過器及び軟水器の販売業務 |
| | ろ過器・軟水器用 充填材販売及び交換業務 |
| | 瀬戸内海総量規制機器販売・保守点検業務 |
| | 汚水（排水）処理用 薬品販売業務 |
| | 劇物毒物一般業務 |
| 産業廃棄物 処理部門 | 産業（特管）廃棄物収集・運搬業務 |
| | 運搬用コンテナ貸出業務（2トン車用） |
| 機械設備 導入部門 | 機械器具 設置工事業務[愛媛県一般建設業許可] |
| | 水中ポンプ・運転機器 設置交換業務 |

出典：佐伯正浩氏提供資料より作成。

会社理念は、「汚水（排水）処理施設に係る業務を中心に、汚水（排水）処理と産業廃棄物処理及び機械設備の設置・提案を、愛媛県内の企業の皆様に独自のノウハウと技術でお届けします」である。

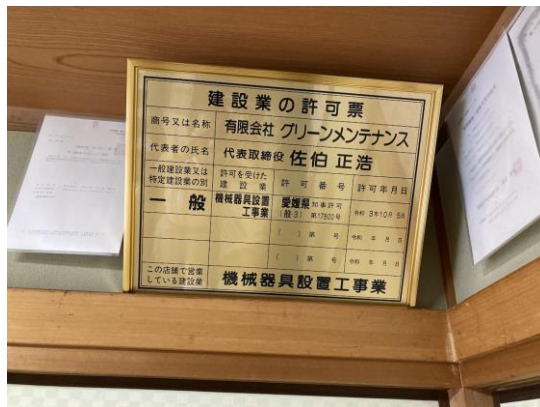
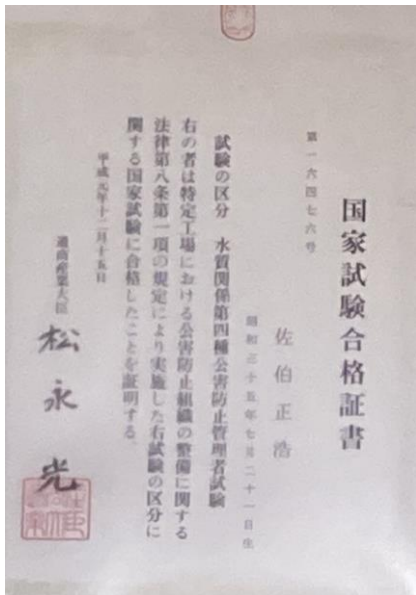
事業内容は表 1 にまとめたように、汚水・排水処理に関連する業



グリーンメンテナンス本社の倉庫には
ところ狭しと機械や道具が置いてある

務全般をカバーしており、そのほかにも産業廃棄物処理や機械設備設置に関わる業務をおこなっている。これらの業務を遂行するために、佐伯氏は独立を決めてから1年ほどの間に水質関係第四種公害防止管理者（国家資格）や浄化槽管理士などの事業に必要な資格を取得した。

浄化槽管理士は1983年浄化槽法にもとづいて設けられた資格であり、当時は試験の回数も講習会場も限定されており、佐伯氏は三重県まで足を運び、講習・試験を受けた。



グリーンメンテナンスの事務所には
資格証明証や業務許可証などがところせましと掲示されている

これらの資格と並行して、会社運営には自治体の許可が必要であり、グリーンメンテナンスでは以下の業務において愛媛県の許可・登録を得ている。

- ・ 劇物毒物一般販売業
- ・ 産業廃棄物収集・運搬業務
- ・ 特別管理産業廃棄物収集・運搬業務
- ・ 機械器具 設置工事業務

産業の盛衰とグリーンメンテナンス

創業当初、グリーンメンテナンスの取引先は、在間染工（株）や泉川染工（株）、越智源（株）など数社あり、浪速環境技術センターに所属していたときから世話になっていた染色加工業者の排水処理・管理・運営にあたった。仕事を請け負って現場で作業をする際、佐伯氏はいつも「平身低頭」を忘れないようにしている。それは昔もいまも変わらない。浪速環境技術センター時代から染色加工業者をはじめ今治の人たちには良くしてもらったという恩義がある。独立してからはなおさらである。

グリーンメンテナンスが創業した1989年はまだ右肩上がりの成長を遂げていたタオル業界であるが、この数年後に苦境に突入する。バブル経済の崩壊や中国を主とする外国製タオルの大量流入によってタオルの売れ行きが鈍化し、生産量、事業所数、従業者数ともに減少し、タオル業界は長い低迷の時代を迎えた。

図2は、今治の染色加工業者数の推移である。グリーンメンテナンス創業時の1989年は23社を数えた染色加工業者は、2000年に19社、2005年には13社にまで減少した。そして現在は7社（愛媛県繊維染色工業組合の組合員数は8社だが実質の稼働は7社）となっている。

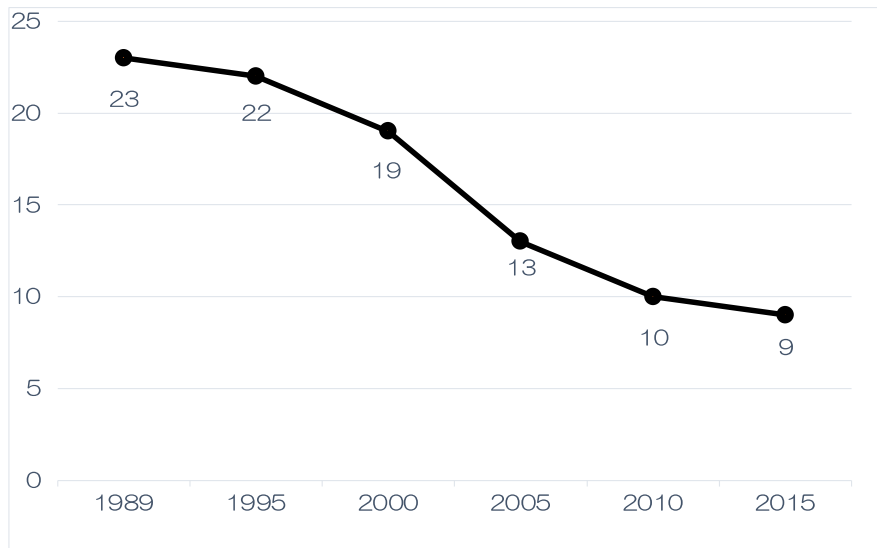


愛媛県繊維染色工業組合

（愛媛県繊維染色工業組合 HP より引用）


創業当時のグリーンメンテナンスの主要取引先はタオルづくりに携わる染色加工業者だったため、タオル業界の低迷は事業の業績に大きな影響を与えたが、1991年頃にタオルとはまったく別のところで新たな大口の取引がはじまった。それがハリソン電機（株）である。

図 2 今治の染色加工業者数の推移



出典：愛媛県繊維染色工業組合提供資料より作成。

ハリソン電機は、東京芝浦電機（株）（現・（株）東芝）によって1944年に設けられた今治工場を前身とするが、戦後に東京芝浦電

機が過度経済力集中排除法  の適用をうけて分離された結果、1950年に新たに設立された会社である。同社は、設立当初より自動車用小形電球を主力事業としているが、1986年に冷陰極放電灯（液晶バックライト用光源）の生産に着手し、自動車用やコンピュータ用に急速に普及していき、冷陰極放電灯で世界一位のシェアをもつ会社に成長した。その後、同社は、2000年に東芝ライテック（株）の一部事業を統合してハリソン東芝ライティング（株）に改組・改称され、2012年には東芝ライテック（株）に吸収合併された。



「（旧）ハリソン電機（株）」

当時の航空写真（1992年当時）

写真提供：東芝ライテック（株）今治事業所

グリーンメンテナンスは、ハリソン電機の工場から出る産業廃棄物の処理や排水処理施設の管理を請け負うようになり、しばらくは売上の70%を占めるようになった。会社の売上也上昇し、佐伯氏は3名の技術者を新しく採用した。しかしながら、2010年頃になると国内のコンピュー

ター生産が韓国の（株）サムソンなど後進勢力によって市場を奪われ、生産量が激減した。この影響で長期にわたる事業の低迷により業績が悪化した、現在の東芝ライテック（株）今治事業所からの依頼で話し合いがもたれ、2013年9月に双方の協議のうえ、契約分についての委託が打ち切られた。当時、グリーンメンテナンスの売上の70%が東芝ライテック今治事業所からのものであったため、佐伯氏は経営の危機に直面した。

地元産業あつてのグリーンメンテナンス

四国タオル工業組合（現・今治タオル工業組合）は、2006年6月、JAPANブランド育成支援事業の認可をうけて今治タオルブランドの構築に向けて動き出した（今治タオルのJAPANブランド育成支援事業については「タオルびと」2013年4月号～7月号を参照）。この成果は徐々にあらわれ、1991年の50,456tを境に下降していた生産量は2009年の9,381tを底として、2010年には上昇に転じた（今治タオル工業組合統計データ「企業数、織機台数、革新織機台数、従業員数、綿糸引渡数量、生産量、輸出・輸入数量の推移」）。

冷陰極放電灯に代わって今治タオルがブランド化の成功でふたたび活気を取り戻し、2013年以降、グリーンメンテナンスのコア事業である汚水・排水処理事業で現在は売上の7割を占めるように

なった。「タイミング的に良かったのは、東芝ライテックさんとタオルが同時に下降しなかったことです。東芝ライテックさんが下降したときにタオルが伸びて元気になってくれて『ああ、タオル業界でいちからがんばろう』とおもいましたね」と佐伯氏。

グリーンメンテナンスは創業以来、口伝えで取引先を増やしていった。ある企業と取引がはじまると、その企業が「あそこが困っているから行ってあげてや」と新しい取引先を紹介してくれた。こう



今治タオル工業組合が入っているテクスポート今治

（今治市観光課より提供）

して、いまでは今治の染色加工業者のほぼすべてと取引をしている。



（有）グリーンメンテナンスと書かれた 2tトラック

佐伯氏は、グリーンメンテナンスの将来を見据えて、既存事業にくわえ総合的なコンサルティング業務も視野に入れている。SDGsが叫ばれる現代社会において、環境問題はわれわれの日常生活とともにある。佐伯氏は、既存事業の延長線上に、環境関係の処理施設を有している事業所に対

してアドバイスをすることで、なるべく快適でコストのかからない現場づくりに貢献したいと考えている。コンサルティング業務も兼ねることで、環境整備を総合的にプロデュースするというイメージである。

（次号につづく）

